し一ッあり、よきほどにあくる、又外の窓には、天氣によりてすだれをかける、

〔茶道筌蹄一〕小座鋪之部

窓　紹鷗好の四疊半の張壁を塗壁にして、ヌリ殘しの窓を明る事、居士（千利休）より始るなり、

定家卿の歌に　大壁に窓ぬりのこす庵までもすさめずてらす秋の夜のつき

連子　突揚窓　北向道陳の好とも、居士のこのみともいふ也、おもやの雪を見るために、道陳つき上ゲ窓をこのむともいへり、窓上ゲの木は、萱ブキに用ゆ、長短とも杉の角、外ニ畔翁好のみじかき木あり、風雨つよき節に用ゆ、竹は長短ともタヽキ屋根に用ゆ、目を前にしてさかさまにして用ゆ、

〔南方錄二〕窓附塗殘名アル窓

住居によりて色々有、風爐先に塗さしを明しは休（千利休）の物好也、田舍にて誠の塗さしを見て數奇屋に用られしと也、和泉河内邊は、壁下地よし多き所故、大方竹なしに、よしにて總つりをかく也、かつらの掛やう、間渡しの平竹（一本角）入樣など、能々了簡すべし、口傳あり、連枝窓もあり、臺目疊の内、左に地敷居に付てはき出し窓もあり、床の内の窓は古織（古田織部正）好也、夫故織部窓といふ、見越窓も古織なり、

〔茶話指月集上〕小座敷に衝上を明ゲたるは道陳、床を四尺三寸に縮たるは、道安にてありしが、休（千利休）もよしとおもひけるにや、その通りに志つる也、（中略）また休が衝上の障子をかけはづしにして、不自由なるを、さる人見て、上に溝をほりて、ひきあけ給へといへば、いやさやうに操ること、われは好ずといふ、

〔三百箇條中之上〕つきあげ是亦昔はなし

口傳曰、大和大納言殿（豐臣秀長）郡山城中の數奇屋に御成のために被立候、大木の松の木の下にた